

■ ■ イタリア語挿入小噺～驚きの婚活デート

Junko Higasa(2013.8.3)

ある日、友人の一人から電話があった。「おまえもソーロソーロ(solo)一人の、孤独な生活から抜けて、身を固めないか？俺の知り合いを紹介してやるよ」

自由気ままに遊んできた俺は気が進まなかったが、男の遊び仲間も次々に結婚し、今まで通り時間の融通が利かなくなった。いつでもデートの相手には不自由しない俺だが、何故か結婚にはなかなか至らず、たまに独り身が寂しくなることもある。「良い機会かもしれない。会っただけ会ってみるか」とその話に乗ることにした。

そこでさっそくドッチャ(doccia)とシャワーを浴びてから、先日スコント(sconto)値引きしてもらい、ジャッカジャッカ(giacca)買い占めたジャケットの中から明るめの色を選び、その上にカッポット(cappotto)コートを羽織り、約束の場所へ到着した。

待つこと30分。なかなか来ない。怒りでイーラ(ira)イーラ感が募る。いつでもきちんと時間を守る友人はいったいドンナ(donna)女性を紹介してくれるのだろうか？こんなに遅れるなんて。待ち合わせスポットではなく、どこかの店にすればよかった。ポ一と立っているのもそろそろ疲れてきた。仕方なく頑張れという気持ちを込めて脚をガムバ(gamba)ガムバと励まし、首をコッコ(collo)コッコと廻して身体をほぐす。

そこへようやく友人が到着した。「やあ、申し訳ない」と済まなそうに頭を下げる。「彼女、気合が入り過ぎて支度に手間取ったみたいで...」と斜め後ろを振り返って一人の女性を前へ押し出した。「コッレーガ(collega)同僚のフランチェスカ」「フランチェスカ、僕の友人のアレッサンドロだ」「じゃ、僕はこれで帰るから、あとはよろしく」と友人は何故か落ち着かない様子であわてて帰っていった。

取り残された二人は一瞬茫然とする。いくら女性との付き合いに慣れている俺とはいえ30分も遅刻して一言も言わない女性は初めてだ。いったい友人とこの同僚はどれ程親しいのだろうか？彼は何故この女性を紹介してくれたのだろうか？真面目な友人の目から見て薦めるだけの良いところがあるのかな？俺の頭に様々な疑問が浮かぶ。彼女はそんな俺を見つめたままだ。ポケットとしていても始まらない。せっかく互いにオシャレに決めてきたのだから、大衆食堂のトラットリア(trattoria)やターヴォラ(tavola)ではなく、小料理屋的なオステリア(osteria)かタヴェルナ(taverna)にしようかな。それとも奮発して高級なリストランテ(ristorante)に入ろうかな？と思ったが、彼女の顔を見たらそういう気も消え失せた。それにこれから長い付き合いになるのなら気楽にいった方が良さそうだ。何事も最初が肝心だ。女性の高級要求度はエスカレートするから無理は禁物だ。そうだ！待っている間にビールの宣伝ビッラ(birra)を受け取った。その店でビールでも飲みながら食事をしよう。そう決めて、二人のファッションでも違和感がない雰囲気その店に彼女を案内した。しかし彼女を見るとウエストにヴィタ(vita)とした服を着ている。これでどのくらい食べられるのだろうか？

そんな心配をよそに、食事が運ばれるとナーゾ(naso)めいた鼻の彼女は口をボッカ(bocca)と大きく開け、頬をグアンチャ(guancia)と膨らませて食べ始めた。鶏肉をポッコ(pollo)ポッコこぼしながら。更にムール貝をコツツェ(cozze) コツツェとスプーンで叩く。「ありえねえー！」そして切り方のフルッタ(frutta)果物には見向きもしない。ムート(muto)黙ったままのこんな態度アリーア(aria)？「信じらんねー！」俺の心の中で終了のゴング(gong)が鳴った。結婚の答えは「はい(si)」ではなく「いいえ(no)」だ。

翌日俺は友人に抗議した。「スマン、それだけは自信がなかった...」何でも恩人の娘で断れなかったようだ。しかしマ(ma)どうでもよい。俺には到底無理な相手だ。俺は怒りが収まったその後にポイ(poi)っと彼女のアドレスをソット(sotto)下に棄てた。